

命あれ。かくてこそ自然の懐にいだかるゝ幼な子の心に光あれ。はたかくてこそ湖畔詩人の歌に人の世の春の旅路のしるべの力をも得らるゝなれ。われらはよのつねの幼な子の心をたゞあどけなしと愛でいつくしめど、よのつねのことによのつね

ならぬ深き心の泉汲まむことこそわれらが尊きつとめなれ。あゝ湖畔の詩人の心は今もなほ心の園の園守の心にかよひていとまたふときとはの教をわれらが心にもなほおごそかに宣るやいかに。

『ポール・ドンビー』（ヂッケンス）（四）

|| 英文學に現れたる子供（二十三） ||

岡田みつ

併しポールが始め幾分持つて居た元氣は銷磨して來てしまつて、奇妙な、老人めいた、考へ込む氣質の方だけが増々發達して來た。唯、彼はそれを人に示さなくなつたのが今迄と違ふので、日に彼の物思ひ、遠慮、沈黙は募つて校内の誰人に對しても親しむといふ事がなかつた。唯一人居るのが好きで、勉強をして居ない時は、家中をぶらつき歩いて見たり、階段はしごたんにいつて腰を掛けて、

廊下の大時計の音に耳を傾けたりするのが、何よりの娛樂であつた。家中の袂具の模様をよく知つて居て、人の思ひもよらぬ形に其を解釋したり、寢間の壁紙の紋様が小さい虎や獅子の型になつて居ると云つたり、床敷物ゆかぢものの正方形や菱形に恐ろしい顔がひそんで見えるなどと云つた。此伴侶のない子供は、妄想の描き出す唐草模様の中に捕はれて、人と掛け離れた生活をしてゐて、誰一人彼を

會得してやるものが無かつた。プリンパー夫人は、變な子だと思ひ召使共は、ボールが鬱いで居るのだと語り合ふ位であつた。最年長の生徒のツーツは、放心家ほんちんかながら、ボールの事だけは氣になると見え、一日に何回でも、

「如何ですか。」と健康を尋ねる。するとボールは、「有り難う。丈夫です。」と必ず答へる。すると亦ツーツは、

「では握手しませう」といふので、ボールは無言はれる通りにするのであつた。

ある夕方、ツーツは机に對つて、手紙を忙しさに書いて居たが、急に妙案が浮んだかして、ペンを置いて、ボールを探しに出て行つた。さんざん探した末、ボールが寢間の窓から、外を眺めて居るのを見付けた。その室へ入るが否や、ツーツは、忘れては大變だといふ風に、

「あのね、……君は何を考へて居るの」といきなり言つた。

「随分いろんな事を考へるんです。」とボールは答へた。

「そうかな……」と案外の事だとも言ふらしく、ツーツは言つた。

「もし死ぬとしたら」とボールはツーツの顔を見るので、ツーツはぎよろとして、不安の様子をした。

「月のよい晩に死んだ方がよう御座んすね。昨夜のやうに、空が晴れて、風が吹いてゐる、ああいふ時が……」

ツーツは、困惑してボールの顔を見、「どうだかな……」と首を振りながら答へた。

「吹くといふ程吹くのでなく、波が濱の砂にあたる時のやうな音を立てる位……昨夜奇麗でしたよ。僕は長い事、水の音をきいて居て、これから起きて外を見たらば、小舟が一つ向ふの方に、月の光を一面浴びて浮いて居ました。帆のある船でね……」

ボールが相手を熟と見て、眞面目に話してゐるので、ツーツも、何か挨拶をしなくてはならぬと考へた、

「密商船さ」といつて見たが、物には二方面あるかと思つて「ひよつとしたら密商取締船かも知れない。」といつた。

「帆のある船がね」とボールは繰り返して、「月の光を一面に浴びて。帆が銀のやうでした。而してそれがすと遠くいつてね、波に揺れながら如何したと思ひます。」

「縦揺をしたらう。」とツーツが言つた。

「手招きするやうでしたよ。僕に來いつてね…」

「あゝ來た！來た！」

ツーツは、今の話の續きに、ボールが急に大聲を出したので、非道く愕然して、

「何が」と言つた。

「姉さんが……あれ、此方を見て、手を振つてゐる。僕が見えるのですよ。僕が見えるのですよ。」

よ。……今晚は、姉さん、御休みなさい……」  
ボールが、窓に立つて手を振つて、姉に挨拶する瞬時のその無限の喜悅と、姉の姿が見えなくなると同時に、その顔から光りが消え失せて、素の陰鬱な面持に歸る、その變化があまりに著しいので、流星のツーツも氣が付く程であつた。

ボールは、日長の頃になつてからは、毎夕、窓に立つて姉を待つのが例になつて居る。フロレンスは時を定めて、學校の前を往きつ戻りつして、ボールの姿を一目でも認めるまで止めなかつた。

二人か互に顔を見合せるのが、ボールの日々の生活の中の、一閃の日光であつた。時には、もつと暗くなつてから、學校の前を唯獨り歩く男があつた。それはボールの父で、ドンビー君は今では土曜日にも、ボールに逢ひに來なくなつた。逢ふ氣分になれないので、自分の愛兒の勉強をしてゐる窓を見上げて、人知れず、眺めたり、希つたり、企圖だり、樂んだりするのであつた。哀れ、此父は、

あの瘦せた子供が、夕暮に波や雲をちつと眺め、飛び過ぐる鳥を見て、自分も翼があれば劣らず舞ひ上らうにと、捕はれの窓に、胸を押當て、居るとも知らぬのであつた。嗚呼！

そのうちに、夏休みが近くなつて來た。しかし、險の重い、此學校の生徒は、狂喜して休を迎へる風は無かつた。そんな事は威嚴ある學校として不似合だといふわけで、盛な別れの會もなく、皆ダラ／＼と出てゆくのであつた。而して各自の行先が、大概は學校よりも一層厭な家なので、よく／＼の元氣者が、長休暇の到來を、まあ止むを得ぬ事と、大人しくあきらめるので、多くの生徒はたゞ／＼厭がりきつて居た。

ポールは、まさかさうではなかつた。夏休暇の後、姉と離れる事になつてゐるのだが、未だ始まりませぬ休暇の、その終りの事を、今から考へる人も無いから、ポールもそんな事はとんと考へないで、嬉しい時が來ると待ち切つてゐた。その

故で寢間の壁紙についてゐる例の虎も獅子も、馴れて戯けて居るやうに見え、床敷物の四角や菱形の中から覗いてゐる恐い顔も、色を和げて、意地悪さうでない眼付をして自分を見ると思つた。廊下の大時計も「坊ちやんどうです」といふ音に、幾分情を籠めて居るかと思はれ、夜中音を絶さない海の響も、悲しい調子ではあるが、ポールが釣り込まれて、眠氣を催す程に心地よく耳に聞こえた。

休暇にもう二週間しか間がないといふ時に、或日、プリンパー嬢がポールを部屋に呼んで、  
「ドンビーさん、あなたの宅へあなたの分析を送るんですよ。」と言つた。

「有りがたう御座います。」とポールは答へた。  
「私の言ふ事が分るのですか。え。」とプリンパー嬢の目でちつとポールを見ながら言つた。

「はい、え。」  
「ドンビーさん、あなたは情けない生徒ですね。」

言葉の意味が解らなかつたら、何故質問しないのですか。」

「ボ」ビブチンさんが物をきゝたがるものでないと教へましたから。」とポールは答へた。

「私に對つてビブチンさんの事を言ふのではありません。決して言つてはいけませんよ。此學校の課業はあんな學校のとは大層ちがふのですから。こんだ今のやうな事を言ふと、罰に、長い暗誦を課します。それを朝の食事前に、一句も違へずに、私の前で言はなくてはいけないのです。」

「ボ」悪い積りで言つたのではないので……。」とポールが辯解し始めた。

「ボ」そんな積りはないなどと、どうか言はずに置いて下さい。」……ブ嬢は小言をいふ時には殊更に丁寧な言葉を使ふので……。「そんな理屈めいた言葉は、私に對つて言はせません。」

ポールは何も言はぬが安全と思つて、唯ブ嬢の

眼鏡を見詰めて居た。ブ嬢は、やがて目の前の書付けの事を言ひ出した。

「ボ」ポール・ドンビーの性格分析……分析といふのは、綜合の反對で、私の記憶する處では「有形、無形の事物を根本の成分に分ち解く」といふ定義をラーカー氏が下してゐます。よう御座んすか。綜合の反對なのですよ。さあ分析といふ事はどういふ事が解つたでせう。」

ポールは一向解りもしなかつたが、一寸首を下げて會釋をした。ブ嬢は書付けに目を注いで、

「ボ」ポール・ドンビーの性格分析……天賦の能力……優秀。學問に對する性向……同前。……八の數を以て最高の標準を示すとすれば、ドンビトの以上の二質は、各六・四分三に相當す。」と此處まで讀んで、ブ嬢はポールが何と思つて居るか、その顔を見た。處が、ポール六・四分の三といふのは、六圓四分の三といふ事だか、六尺四分の三といふのだから、其とも未だ自分の學ばぬ六何

とやらいふものなだか分らないので、手を揉みながら、ブ嬢を熟と見た。それが此場合に丁度適當した所作だつたので、ブ嬢は更に續けた。

ブ「違犯…二。我儘…二。下品の人物を喜ぶ傾向（グラブといへる人物に對する場合の如き）始め七なりしが次第に減少せり。紳士的態度…四、（ますくく進歩の望あり）…それからね、殊になたに注意してもらひたいのは、此分析の終りにある、觀察といふ處なのですよ。」

ポールはよく聞かうと身構へをした。ブ嬢は聲高く一語を讀んでは、小さいドンビーに目を注いで、

ブ「ドンビーは能力、性行共に良く、學業も豫期の如くに進歩せりと雖、茲に悲むべきは、此小年は性質及行爲の奇異なる事なり。譴責を加ふべき程の事なくして、しかもその行爲、思想は、彼と同年齡、同地位の普通の少年と、大に異なれり。……ねドンビーさん解りましたか。」とい

つて、書付を下へ置いた。

ボ「え大抵解りました。」

ブ「この分析は御父様の處へ行くのですよ。あなたの行爲や性質が、異様だといふのを御聞きになつたら、御父様は心配なさるでせう。此校でも皆心配してゐるので、私共もどうも心の底からあなたが好きだといふ譯に行かないのです。」

ブ嬢は、此の子の最痛所に觸れたのであつた。ポールは、實家へ歸る日が近くに連れ、校内の人が皆自分を好きになつて呉れるやうにと密かに努力してゐたので、何故か自分にも理屈は分らぬながら、このあらゆる人、あらゆる物に對して、惜しい愛しいといふ情が次第々々に湧いて來たのである。ポールは、自分が去つた後に、人が自分に冷淡であらうかと、其が堪へがたい苦痛になつて來た。皆が自分を懐かしいものと思つて呉れるやうにと、今では大きな兎毛の犬の機嫌でも取るやうになつて居る。この犬は學校の裏につながれて

ゐて、これ迄はボールは怖いものとはばかり思つて居たのだが、これは犬でも、後で、自分を慕つてくれるやうにと願つたのである。

それで、今ボールはブ嬢に向つて、表向きの分析は兎に角、どうか自分を可愛いがつてくれと一生懸命に頼むだ。(こんな所作が普通の子と違ふのだとは夢にも思はないで)。丁度其處へブ夫人が來合せたので、ボールは亦この人にも同様に懇願した。ブ夫人は、ボールを前に置いて、例の口癖の「變な子だ」を繰り返した。ボールは、仰は御尤であるが自分の病氣の故(せ)でもあらうから、とにかく變なといふ事を見逃して欲しい。自分はこの校の人を皆好いてゐるからといつて、

ボ「でも勿論、姉さん程に好きではないのですよ。あんなやうにしるといつてもとても出來ません。誰だつてあれ程に好けと言ひはしませんね。」と眞直(まっ)と、内氣(うちき)とを打交せて、ものをいふ點はボールの奇異な且可愛いらしい性質の一つ

であつた。ブ夫人は、

「ほんとに古風な老人じみた子だよ。」と小聲でいつた。ボールは語を繼いで、

ボ「僕はこゝの人を皆好きです。僕が此校(こ)を出る時に、皆がいゝ鹽梅(しほづめ)だといつて喜んだり、又平氣(ひら)でゐたりされるとほんとに厭(いや)です。」といつた。

ブ夫人は、ボールが世界中無類の變な子だといふ事をいよく堅く信じて、博士にもその由を話すと、博士も反對はしなかつたが、ボールの入學當時にいつたやうにやつぱり「勉強させると直る」といつて、此際もブ嬢に向つて、どん／＼勉強させろ／＼といつた。

ブ嬢は、もとより及ぶかぎりボールを責め立て／＼してゐるのであるから、ボールは随分重い負擔に苦んだ。しかし、ボールは課業を果す以外に、今ではも一つ他に目的があつて、其れを終始實行してゐた。即ちボールは自分が、優しい、物靜な、

役に立つ少年になつて、人に可愛いがられ大事が  
られたいといふのであつた。それでまへのやうに  
階段に坐を占めてゐたり窓から波や雲を眺めてゐ  
る事は今でも時折あるが、此節は同輩の中に交つ  
て、人知れず何か手助けをしてゐる方が多くなつ  
た。それで堅くるしい傍目もふらぬこゝの生徒の  
間にも、ボールは、面白い人物可愛い、遊び相手  
といふ事になつて、誰れ一人ボールに手荒くしや  
うとするものがなかつた。さうかといつて、ポー  
ルは性格をかへる事も出来ず、分析を書き換へる  
事も出来ず、やはり奇妙な子で通つてゐた。一方  
には奇妙な子であつたが爲に、他人の望んで得ら  
ぬ特権も亦彼のものであつた。例へば、夜、寢  
室へ退く時に、生徒は皆博士及びその家族一同  
に目禮するだけなのに、ボールは細い手を出して、  
大膽に博士にも、ブ夫人にも、ブ嬢にも握手した。  
又、誰か罰を受けやうとして居る時に詫にゆく  
役は、ボールと定まつてゐた。小使でさへ、皿小

鉢を破した時に、如何しやうとボールに相談をし  
た事があつた。而して、食事掛の喧しやの男がボ  
ールだけは最負にして、丈夫になるやうにと、ボ  
ールの飲むビールの中へ、ポーター酒を時々混せ  
てやるとの評判さへあつた。それから尙一層の特  
権はライダーといふ先生の室へ、自由に入出入を  
許されてゐる事であつた。先生の處で、ツーツと  
先生とが話をしてゐる傍で、ボールは黙つて聞い  
てゐると、先生は時折ロンドンの秘密な暗黒方面  
を語り出して、此休みには、其秘密の中に立ち交  
つて、自身で研究してくる積りであるなどといふ  
ので、ボールは、先生を大冒險家、大旅行家のや  
うに心得て、こんな素晴らしい人の傍にと憚り多  
く思つた。

ある晩夏休のごく少し前に、フェーダー先生の  
室へ入つたところが、先生は忙しさうに印刷した  
手紙の空白のところへ、字を書き入れてゐる傍か  
ら、ツーツがそれを疊んで、封筒に入れて居た。



フヒーダー先生は、

「オヤ、ドンビーかい。……それ之が君のだ。」と  
いつて、その手紙の一つを投げてくれた。

「私のですつて！」

「あゝ招待状さ。」

ポールは明けて見ると、ブ博士夫妻の名で、七月十七日水曜に、舞踏會を催すに就いて、午後七時に御來臨を乞ふといふ意味が印刷してあつた。

フヒーダー先生は、フロレンスも招待されてゐるといつて、こんどの催は丁度休暇の始まる日にあるのであるからポールは會の了りに、すぐ姉さんと一所に歸宅してもよいと言ひ添へた。

ポールは喜んでフヒーダー先生に御禮をいつて、ツーツの傍へ坐を占めたが、數日前から、重くて苦しかつた頭部が、此晩は別けて變で、思はず手で頭部を抑へた。その中に、頭がだん／＼下がつて、終しまひにツーツの膝へくツ付いてしまつて、もう一生上がりさうもないやうな心持になつた。

ポールは聾つんばになつた覺はないと思ふが、暫時氣でも遠くなつたのか、ふと、フヒーダー先生が耳元で自分の名を呼んでゐて、靜に自分を揺ぶつてゐるのに氣が付いた。驚いて顔をあげて、四方を見廻はすと、ブリンバー博士も室に入つて來て居られ、窓が明け放してあつて、自分の額は濡れて居る。いつの間、かういふ事が行はれたか、自分の知らないのが變でたまらなかつた。

「あゝ、よい鹽梅だ／＼。どんな氣分だね。」とブ博士は力を添へるやうに言つた。

「何とも御座いませぬ。」とポールは答へた。が、床かまがどうかしたのか、自分はしやんと立つて居られない。壁もどうかしたのかぐら／＼廻轉まわするやうで、一ツ所を熟じよくと見詰めて居なくてはならなかつた。ツーツの頭がいやに大きく見えたり、いやに遠くに見えたりした。ツーツがポールを抱いて、二階へ連れていつて呉れる途中も、ポールは室の戸が思ひがけぬ處にあるので、ツーツは、煙突の中

を上がつて行くのではないかと思はれた。ツーツが、大事さうに自分を抱いていつて呉れるから親切だと思つて、禮をいつた。すると、ツーツはこんな事は何でもない、もつとくゝいろくゝの事をして上げるといつて、成程、ボールの衣物を脱がせ、臥床へ横にしてくれて、其から傍へ坐つてにこくしてゐた。と思ふと、いつの間にかツーツがビブチンさんに變はつてしまつた。併し、どうした譯と尋ねる程の好奇心もなく、ビブチンさんだなど氣が付いた時に、いきなり、ボールは、

ボ「ビブチンさん、姉さんに言つてはいけませんよ。」と叫んだ。

と姉さんに、何を言つてはいけないの。」といひながらビブチンさんは臥床の近くへ椅子を引きよせた。

ボ「僕の事を。」

ビ「いえ。言ひませんよ。」

ボ「僕が大きくなつたら、どうする積りだか御存

じ？」と、ボールは顔を横向にして問うた。

ビブチンさんは、思ひ付かないと答へた。

ボ「ありつたけの御金を皆一所に銀行に預けて、あと一文も儲けないで、姉さんと田舎へいつて、美しい庭や里や森や何かで一生姉さんと暮らすの。」

ビ「まあ。」とビブチンさんは叫んだ。

ボ「え。さうする積りなの、もし僕が……。」といつて言ひ淀んで、暫時黙つて居た。ビブチンさんは唯ボールの顔を見守つてゐた。

ボ「もし僕が大きくなれたら……ね……。」(續く)